

## 特集 他とかかわる力を育てる

# 「コミュニケーションを支える文法」を身につけるには

岸本映子 (元大阪市立港南中学校)



文法の指導においては、一般に言語的な要素の指導だけに留まる場合が多い。例えば、受身形であれば「be 動詞+動詞の過去分詞」の指導である。しかしコミュニケーションを支える文法として考えるなら、言語使用についての情報も指導する必要がある。つまりそれがどのような内容を表すのか、どのような話し手の意向を伝達するのかという情報である。そのためには、言語構造がその意味や機能とともに広いコンテキストの中で扱われることが必要である。ここでは2年 LESSON 8 の受身形の授業展開に例をとり、どうすれば効果的かを見てゆきたい。

### 効果的な文法の導入

一般的に受身形の文は能動態の文からの変換として扱われる場合が多い。例えば LESSON 8 の Part 1 (p.92) には、次のような能動態と受身形の文が提示してある。

Someone washes the car every day.

The car is washed every day.

これを導入する場合、能動態の目的語の the car が主語の位置にきて、動詞は be 動詞+過去分詞の形になる、といった形式的な操作の説明が先にくる。能動態から受身形への変換は実際の場面では必要のない操作であるし、指導の焦点がぼやける。

Someone washes the car every day.

The car is washed every day.

それよりも、受身形には今まで学習した能動態の

文とどのような概念的違いがあるかをまず理解させることが大切である。能動文と受身文の違いはある1つの同じ出来ごと(命題文)に対して、異なる焦点化で述べられていることである。能動文は行為者が主語の位置にあり、その行為者に焦点がある。それに対し、受身文は行為を受けたものが主語の位置にくるので、その受動者(もの)に焦点が当たる。焦点化は強いストレスによっても可能であるが、一般的には主語の位置にくるものがその文の主題であり、そこに焦点があると考えられる。

では、具体的にどのように導入すればよいだろうか。このことを次のような図を用いて提示し、どのような場合に受身文を使うかをまず理解させる。



2年 LESSON 8  
(P.101)

Tom washed the car



The car was washed by Tom.



基本的に、能動文と受身文の意味には焦点化の違いがある。Tom washed the car. は Tom に焦点がありスポットライトが当たる。受身文の The car was washed by Tom. は行為を受けた車に焦点があり、そこにスポットライトが当たる。言語構造とこのような概念の相違を提示して指導する

と、言語使用の場面にも役立つと思われる。

## 具体的な活動例

受身文の焦点化とその意味の理解にはいくつかの例文を使って練習をするが、焦点が何に当たっているかを絵や図を使った約束事でルール化しておくことが有効である。またその内容については、学習者がよく知っている内容を取り扱うようにする。学習者の意識が受身とその意味だけに集中できるようにさせ、負担の軽減を図る。例えば、次のように自分たちの学級に関することは学習者の高い興味・関心が得られる。いくつか例を提示する。

### (1) 個人の持ち物

This is a cup. Mr ~ drinks tea every day.	
Mr ~ uses the cup. (人の絵を提示)	
 (人間を代表する絵)	
The cup is used by Mr~. (コップの絵を提示)	
 (ものを代表する絵)	

This is a pencil case.

Ms ~ uses the pencil case.

The pencil case is used by ~.

### (2) 教室の掃除

This classroom is cleaned by ~ today.

(日直の人や班の名前を入れる。)

This classroom was cleaned by ~ yesterday.

This desk is used by ~.

This chair is used by ~.

先生や学習者の持ち物を実際に示して受身文を提示し、口頭練習させる。あるいは、黒板に日直の名前やその日の掃除当番が書いてあることが多いが、これを利用して英語を口頭練習する。日直や掃除当番は学習者の関心が高いので、This classroom is cleaned by the group two. 「2班の皆さん。がんばってね」と一言付け加えるだけで、その受身文の意味は学習者に理解されるだろう。未来形は

LESSON 3 で既習なので、来週 1 週間の掃除当番表を英語で作成させる課題へと発展することも可能である。

受身文の指導では、1つのテーマで、1つの動詞に限定して様々な意味内容の例を提示するようにする。例えば、2年の LESSON 2 (P.16,17) にある A Calendar of the Earth のカレンダーを利用して、was found の受身文の英語表現ができる。

The earth was born in 4.6 billion years ago. Human was found in 7 million years ago.

46億年前から7万年前までの間に、どのような生物がどのような順序で地球上に登場するのかを英語で表現する。例えば、くらげ(jellyfish)、トンボ(dragonfly)などの昆虫類は恐竜以前に出現する。Jellyfish was found in 600 million years ago. が、カレンダーのどの年代に入るかをクイズにするのもおもしろいのである。

導入は、規則変化動詞の過去分詞を使って行う。それがある程度定着してから、不規則変化動詞の過去分詞を使って受身形を提示するとわかりやすい。

## 「文法の要点」の活用

各 LESSON のあとに、「まとめ 文法の要点」がある。LESSON 中の Unit は何日間かをかけて指導するだろうから、そのまとめとして学習内容の全体像を確認することが必要となる。Unit が終了して USE Read に入る前に、学習内容の全体像を把握させる。この全体像の確認がないままに長文に入ると、学習者は難しいと感じるかもしれない。英語が苦手な学習者は、長文を見て、既習の言語構造の文に混じっている新しく学習した受身文を見つけられるだけでもよいだろう。

言語構造とともに言語使用の情報も提示して、1つの文法事項の文でもコミュニケーションができるように工夫することが大切である。日頃から、学習者の持っている既存知識、興味・関心を知っておくことが指導の鍵となる。